

本当の教えに出遇うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第95号

発行:2025年7月20日
発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
住職 天野英昭
〒739-0147 東広島市八本松西6丁目10番1号
TEL・fax(082)428-1360

行事予定 (7月～11月)

	日(曜)	時 間	行 事	ご講師	場所
7	24 (木)	14:00～15:30	歎異抄輪読会	松田正典先生	本堂
8	1 (金)	朝席 9:00～ 昼席 13:00～	盆法座	高梁市成羽町 浄福寺ご住職 山下瑞円 師	本堂
8	12 (火)	18:00～19:30	天龍寺墓苑合同参拝 (お盆のお参り)		天龍寺 墓苑
9	23 (火)	15:00～16:00	天龍寺墓苑合同墓 参拝 (お彼岸お参り)		天龍寺 墓苑
9	29 (月)	朝席 9:00～ 昼席 13:00～	秋季彼岸法座	北広島町 本立寺ご住職 朝枝暁範 師	本堂
11	16 (日)	朝席 9:00～ 昼席 13:00～	報恩講並びに 秋季永代経法座	福山市沼隈町 光源寺ご住職 北山裕章 師	本堂

※ 8月以降の歎異抄輪読会の日程はグループラインまたはお電話にてお知らせ致します。

天龍寺墓苑並びに永代供養墓のご関係のみなさまへ (お願い)

先般、天龍寺墓苑事務所にも張り紙をさせていただきご説明をさせていただきましたが、長年に渡りご勤務していただきました吉河様が一身上の理由で、5月末をもって辞められました。よって業務は天龍寺が、引き続きさせていただくこととなりました。

大変申しにくいことですが、8月12日に毎年行っております天龍寺墓苑合同参拝の件ですが、何年も前から行政の方から、天龍寺墓苑内での「盆灯籠」等の販売を止めて欲しいとご進言をいただいております。この度、その行政の方からのご進言を受け入れることとなりました。

故にみなさまには大変ご迷惑をおかけしますが、今後天龍寺墓苑内での「盆灯籠」等の販売を中止させていただくこととなります。よって各自、天龍寺墓苑合同参拝の際には、盆灯籠をご持参いただくこととなりますことご理解をいただければありがたいと存じます。

重ねてご迷惑をおかけしますこと深くお詫び申し上げます。

近頃よく思い出す事を少し書いてみました。

私たちは相対（比較）・有限（限りのある）世界に生を受けた故に、いくら娑婆の縁が恋しいと思っても、いつかはこの娑婆の縁を離れる時がきます。四苦八苦の語源はお釈迦様が最初にお悟りを開かれた時に「人間には四つの苦しみがある。さらにあと四つの苦しみ」と説かれ、四つと八つで四苦八苦という言葉となったとある方からお聞きした事があります。その八つの苦しみの中に、ご存じかも知れませんが、愛別離苦という言葉があります。いくら愛し合っても・いくら愛おしいと思っても、限りの世界に生を受けたら、離れる時がやってき、その苦しみ・悲しみ等を愛別離苦と表現されました。

ある先生のお言葉をお借りしますと「この限りの世界に生を受けたという事は、残念ながら愛別離苦の言葉の如く、深い悲しみ等をこの境涯で受ける事を宿命づけられた存在として、私たち人間は生を受けた」とあるご本の中で言っておられました。

しかし一方で親鸞聖人は、「弥陀の本願と申すは、名号（南無阿弥陀仏）を称えん者をば極楽に迎えん」と誓われております。安芸門徒のお墓には「俱会一处」という文字が刻まれている事があります。これは、娑婆の縁が切れ、お浄土に帰らせていただいて、また遇える世界の事を言っています。人間の五感では見る事も触れる事も出来ない世界ですが、その五感を越えた世界を信じて救われる人生があると思っております。

少し私ごとで申し訳ございませんが、教員生活 30 年の中で、私は 3 人の生徒と別れをしました。どの生徒も高校 3 年生の時に亡くなりました。一人は交通事故・一人は急性白血病そしてもう一人は難病の生徒でした。この生徒も高校 1 年から 3 年間担任しましたが、自分の人生がそう長くない事を知っておりました。その生徒は 3 年生の 6 月に亡くなりましたが、その 3 週間前に、彼女が入院している病院に見舞いに行ったのが、最後でした。その見舞いに行った時には、すでに体の機能が衰えベッドから起き上がることも出来ない状態でした。私がベッドの側に行きますと何か私に話をしました。よく聞き取れなかったので、私は耳を彼女の口元へ近づけますと「先生待っているからね」という彼女のか細い声が聞こえました。私は涙を流しながら、「待ってろよ」と言いました。するとそこにいらっしゃった御両親が、彼女に向かって手をあわされました。この生徒にどこで「俱会一处」の世界の話をしたか覚えておりません。しかし、この生徒も五感を越えた世界を信じて救われた一人であったと思います。

残念ながら私たちは相対（比較）の世界に生を受け、日々勝った負けた、得した損した、大きい小さい、長い短い、役に立つ役に立たない等と言った相対の世界における迷いに翻弄されながら生きていかななくてはならず、はっと気がつけば老病死が目の前に来て、「私の人生は何だったのか」と問わずにはおれない生き方をしているのかもしれませんが。

最後にある先生のお言葉を引用させていただきます。先生は大切な事は「日々の一步が何のためなのか？またその一步がどこに向かってる一步なのか？を知ることが大切だと言われております。」この事を浄土真宗的に申しますならば、日々の一步が願われた私が願われた私にならさせていただくご縁として受け止めさせていただき、また日々の一步がお浄土に向かっての一步であると思うところでございます。社会一般の考え方から申しますれば、人間は「おギャー」として生まれた瞬間から死に向かっていく存在です。これはある意味引き算の人生観だと思う事があります。「後何年・後何年」しかしながら浄土真宗を心のよりどころにしています者は、今申しました生徒の如く「お浄土」に向かっていく人生であり、過去・現在・未来の三世を超えた浄土真宗の救いがここに開かれてくるものだと思っております。

